

神戸市長田区研究活動報告書

地域住民の交流の拡大に着目した 新長田エリアの商店街アーケードの機能評価

2017年01月09日

京都大学防災研究所

小谷 仁務

横松 宗太

神戸市長田区研究活動報告書

地域住民の交流の拡大に着目した新長田エリアの商店街アーケードの機能評価

小谷 仁務¹・横松 宗太²

¹ 京都大学防災研究所 災害リスクマネジメント研究室 (〒 611-0011 京都府宇治市五ヶ庄)

E-mail: kotani.hitomu.23m@st.kyoto-u.ac.jp Phone: 0774-38-4284

² 京都大学防災研究所 災害リスクマネジメント研究室 (〒 611-0011 京都府宇治市五ヶ庄)

E-mail: yoko@drs.dpri.kyoto-u.ac.jp Phone: 0774-38-4279

要旨

本報告書では、京都大学防災研究所・災害リスクマネジメント研究室の小谷と横松を中心としたグループが2012年より神戸市長田区 JR 新長田駅南部の商店街周辺を対象として行ってきた一連の研究活動の差し当たっての総括を行います。一連の活動では、地域の商店街アーケードや街並みなどの地域のインフラストラクチャーの視点から、地域コミュニティの交流の問題を研究してきました。具体的には、(1) 震災後の物理的環境である商店街アーケードの変貌によって、買い物時の行動規範が「おしゃべりをしながら買い物する」ことから「商品のみを見て無言で買い物をする」ことへと変わったのかを検証しました。次いで(2) 新しい商店街アーケードで行われるようになった地域の共同行事が日常生活の交流の拡大に果たす役割を分析し、それを通じ、新しい商店街アーケードの機能を明らかにすることを目指しました。

本報告書では、まず、ここまでの私たちの研究活動を振り返り、震災後の地域のインフラの変貌によって買い物時に交わすおしゃべりという行動が変容した可能性を明らかにしたことを述べます。次いで、新たな大正筋商店街アーケードで開かれる縁日を対象とし、私たちが開発した社会ネットワークに関するシミュレーションモデルを用い、縁日が日常生活の交流を拡大してきた効果を定量的に評価します。また、その効果に寄与する商店街アーケードの空間的特性を示します。これらを通じて、地域コミュニティの日常生活の交流の拡大の視点から、これまで看過されてきた新しい大正筋商店街のアーケードの機能を明らかにします。

目次

1	報告書の趣旨	1
2	神戸市長田区における私たちのこれまでの活動概要	1
2.1	商店街アーケードの変貌と買い物時に交わすおしゃべり	2
2.2	新しい商店街アーケードでの地域の共同行事が生み出す日常生活の交流	2
3	新しい商店街アーケードでの縁日がもたらす日常生活の交流の拡大の定量的分析	3
3.1	シミュレーションモデルの概要	3
3.2	定量的分析における設定	4
3.3	調査の概要	5
3.4	定量的分析の結果	5
4	縁日が行われる商店街アーケードの空間的特性の効果	6
5	まとめ	6
付録 A	調査項目	7
付録 B	回答者の属性	17
付録 C	3.3 の調査で得られたその他の知見	17
C.1	縁日への参加状況や縁日での交流	17
C.2	対象地域における縁日以外の機会での出会い	17
C.3	縁日をきっかけに生まれる地域の日常生活の交流	18
C.4	縁日への支払意思額	20
C.5	自由回答欄における意見	21
C.5.1	子どもが楽しめる縁日や地域行事の実現	21
C.5.2	地域に根差した縁日や地域行事の実現	21
C.5.3	安全な縁日や地域行事の実現	22
C.5.4	PR や告知	22
C.5.5	音や時間帯	22
C.5.6	縁日や地域行事での空間の使い方	22

1 報告書の趣旨

本報告書の執筆者の小谷と横松を中心としたグループは、2012年より、神戸市長田区のJR新長田駅南部の商店街周辺（以降、「新長田」と呼びます）を対象に、阪神・淡路大震災後の復興事業による商店街アーケードや街並みなどのインフラストラクチャー（以降、「インフラ」と呼びます）の変化に着目し、それが地域住民の交流に与える影響について一連の研究を行ってきました。そして、去る2016年9月に、この研究活動の中心的役割を担ってきた小谷が、これまでの活動の成果を部分的に含む博士論文を書き終えました。そこで、1つの区切りとして、これまでの私たちの新長田での活動を振り返ることとします。さらに、新たな商店街アーケードで開かれる縁日と地域住民の交流の拡大に関して新たに得られた知見を示し、これまで見過ごされてきた新たな商店街アーケードの機能を報告します。これらを通じて、一連の活動の差し当たっての総括を行うことを目的とします。

以下、2では、一連の研究の着眼点や目的、仮説、得られた知見の概要を示します。そして、以降では、新たな商店街アーケードでの縁日が日常生活の交流を拡大してきた効果を定量化し、現在の商店街アーケードの看過されてきた役割を示すことを述べます。3では、その分析に用いるシミュレーションモデルの概要や分析結果を示します。4では、縁日がもつ日常生活の交流の拡大効果に寄与する商店街アーケードの空間的特性を示します。5では、これまでの活動を踏まえ、3や4で得られた知見をまとめます。

2 神戸市長田区における私たちのこれまでの活動概要

小谷と横松を中心としたグループによる一連の研究の発端は、新長田における「復興災害」[1]と呼ばれる状況を知ったことです。阪神・淡路大震災後の耐震性や耐火性の向上を重視した復興事業で、下町風情漂う新長田の商店街は、道幅が広く屋根が高い近代的なアーケード街へと変貌しました。しかし、その後、新しい商店街から客足は遠のき、通りは閑散とするようになりました。それによって、再開発ビルの店舗は賃貸でも借り手が見つからなかったり、店舗の資産価値の下落によって、廃業を決めても売却できなかったりする問題も発生しました。そのため、多額の費用が投じられた巨大なアーケードや復興政策は批判を受けました[2]-[4]。復興政策や事業によって引き起こされたこれらの問題が「復興災害」と称されています。

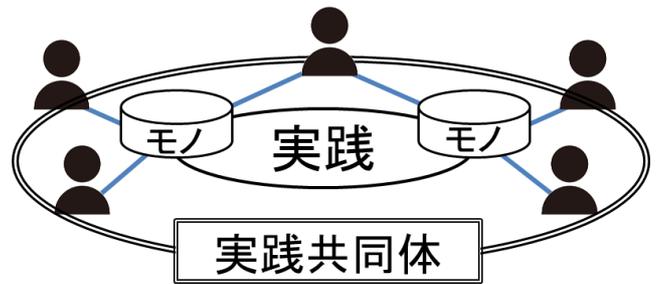


図 1: 実践共同体の概念図

私たちは、復興災害における商店街の賑わいの喪失の問題や今後の地域内のコミュニケーションの活性化を考えるにあたり、地域の商店街アーケードや街並みなどの地域インフラを社会心理学の「実践共同体論」[5]におけるアーティファクトとして捉えることにしました。実践共同体論では、図1に示すように、個々人の日課や地域の祭り、催事などのあらゆる活動（実践）は人のみならず「モノ」も含めた他者との共同体によって行われるものと考えます。そして、実践を共になすモノは「アーティファクト」[6]と呼ばれます。実践共同体論によれば、共同体の構成員やアーティファクトが変われば、成立する実践も変化します。したがって、災害によって商店街アーケードや公共スペースなどの地域インフラの形態が変われば、日頃の買い物行動や地域行事のやり方も変わることが予想されます。

これを踏まえ、私たちは、地域のアーティファクト、つまり商店街アーケードという地域のインフラに着目し、(1)震災後のインフラの変貌が買い物時に交わすおしゃべりという共同の実践にもたらす影響を検証、分析してきました。この詳細を2.1で述べます。次いで、(2)新しい商店街アーケードで行われるようになった共同の実践である地域の共同行事が日常生活の交流の拡大に果たす役割を分析します。それを通じ、新しい商店街アーケードの機能を明らかにすることを目指しました。この詳細を2.2で述べます。私たちのアプローチの独創性は、(1)震災後の地域内の交流の問題を地域インフラの視点を持ち分析し、新たなインフラの役割を明らかにする点と、(2)インタビュー調査などによる質的アプローチのみならず、数理モデルを用いた数理的、数量的なアプローチを主として用いる点です。

2.1 商店街アーケードの変貌と買い物時に交わすおしゃべり

まず、私たちは、震災後の商店街の人通りの減少や日頃の活気の喪失は、物理的環境である商店街アーケードの変貌によってもたらされたものではないかという仮説をもちました。別言すれば、新しい近代的な商店街アーケードは、客同士、あるいは店主と「おしゃべりをしながら買い物をする」という実践に適さず、まるで買い物客にデパートにいるような気にさせ、デパートで行うような無言の買い物行動をとることを促したと考えました。例えば、デパートの洋服売り場においては、展示された服を眺めている買い手に売り手が話しかけたとき、買い手が話しかけられるのを嫌がり、売り場を離れるといったことがあります。この例は、デパートのような空間では、買い手の買い物時の行動規範が無言で行う買い物行動へと変容しうることを示唆しています。以上から、新しい近代的な商店街アーケードが、「おしゃべりをせずに、商品のみを見て買い物をする」という実践に適しているため、この実践が買い物客にとられるようになり地域に根付いたのではないかと仮説をもちました。

私たちは2012年12月に商店街店主や客へのインタビューやアンケート調査を行い、商店街アーケードの変貌やそれに伴う地域愛着の低下が買い物時のおしゃべりの減少を招いた可能性があることを示しました[7]。そして、日頃の買い物時のおしゃべりの減少が、地域における住民間のコミュニケーションの減少につながっている可能性を指摘しました。その後、小谷・横松(2014)[8]は、数理モデルを用いた理論的アプローチによって、物理的環境の変化と地域の共同実践の形成過程の関係を理論的に分析しました。ここでは、商店街アーケードの近代的な外観や形態が、おしゃべりをせずに、商品のみを見て買い物をするという実践を地域に根付かせうることを理論的にも示しました。また、小谷ら(2013)[9]は、買い物時のおしゃべりが活発になる新たな取り組みを提案するため、2013年4月に新長田の商店街の買い物客への街頭インタビューを行いました。そのインタビューを踏まえ、服装というアーティファクトを変え、部屋着で買い物をしてもらうことによって、買い物時のおしゃべりが促されるのではないかと一つ一つの案を示しました。

2.2 新しい商店街アーケードでの地域の共同行事が生み出す日常生活の交流

日頃の買い物時の交流が少なくなった一方で、震災後の新しい商店街では、非日常的なイベントが多数行われるようになりました。そして、そのイベントで様々な背景をもつ住民同士が一同に会し、普段出会わない人たちとの協働を通じて、日常生活の交流が広がっていることを私たちは知りました。例えば、新しいモニュメントの建設や行事が相次いで開催されるなど、地元の様々なステークホルダーが地域活性化のための取り組みを重ね、商店街間の新たな協働や地元の外国人住民との交流が生まれています。同時に、伝統行事である縁日や地蔵盆も脈々と続いています。とりわけ、震災後の縁日は新しい商店街アーケードの大きな空間を利用することによって、店主のみならず、主婦や学生も出店やイベントにさらに参加できるようになりました。そして、縁日の構成員の数や多様性が増したことで、縁日での新たな交流が生まれ、その交流をきっかけに、縁日を離れた日常生活でも新たな交流が生まれています。この日常生活の交流の広がりや、さらには新しい商店街アーケードの空間的特性の変化がもたらした価値と考えることができます。同じ世代や職種などの同じグループ内の交流に加え、異なるグループ間の交流の度合いを高めているとすれば、災害時の共助の実現可能性を高めたり、情報の伝達を早めたりすることにつながっているでしょう[10]-[11]。

そこで、私たちは、巨大な空間をもつ新しい商店街アーケードは、非日常的イベントである地域の共同行事を開催しやすくし、それがなければ出会わなかったであろう人同士を知り合わせ、日常生活の交流(社会ネットワーク)を広げているのではないかと仮説をもちました。また、その交流の拡大や、その拡大効果に寄与する商店街アーケードの空間的特性を量的に明らかにする必要があったと感じました。

その仮説を検証するため、縁日と地蔵盆を取り上げ、2014年11月に商店街近隣住民へアンケート調査を行い、それらの行事が地域の社会ネットワーク形成に果たす影響やその社会ネットワークがもつ機能の基礎的な分析を行いました[12]。結果として、行事の幹事が様々な役割の参加者と交流している状況にあることがわかりました。そして、ある一定割合の人が縁日や地蔵盆で新たな知り合いをつくった経験があることがわかりました。また、行事を離れた日常生活でも交流を続ける相手は、性別や年齢といった個人属性が完全には同じ相手ではなく、異な

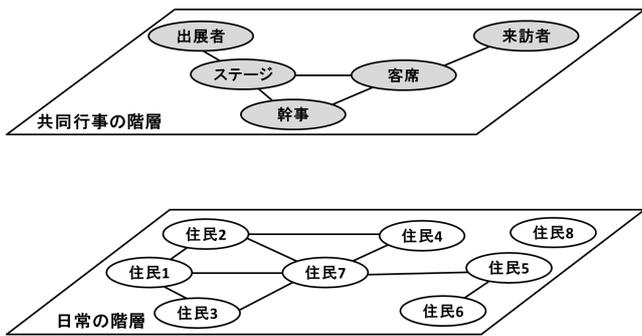


図 2: 階層型の社会ネットワークモデル

る部分を一部もつ相手であることがわかりました。これら行事で生まれる新しい交流が個人的に直接会うような付き合いに発展する場合には、その交流関係は災害時の助け合いを促す可能性があることも明らかになりました。

以上がこれまでの活動概要です。以降では、対象を大正筋商店街で開かれる縁日に絞り、対象地域のデータと私たちが開発したシミュレーションモデルを用い、縁日およびそれが開かれる商店街アーケードの空間的特性が地域の社会ネットワークを拡大す

る効果を計測します。具体的には、新しい商店街で縁日が開かれるようになってから縁日がどれだけ地域の日常生活の交流が拡大してきたかという長期的な効果を計量します。そして商店街アーケードのどの空間的特性が日常生活の交流の拡大に寄与しているのかを示し、地域の交流の拡大の視点から商店街アーケードの機能を明らかにします。

3 新しい商店街アーケードでの縁日がもたらす日常生活の交流の拡大の定量的分析

3.1 シミュレーションモデルの概要

ここでは、地域行事である縁日およびそれが開かれる商店街アーケードの空間的特性が地域の社会ネットワークを拡大する効果を定量的に分析するためのシミュレーションモデルの概要を示します。

本モデルは、実践共同体としての地域の縁日での交流と日常生活の交流を別の階層において表現した、階層型の社会ネットワークモデルを考えます。図 2 にモデルの模式図を示します。このモデルによって、縁日での交流が日常生活の交流に影響を与えることを表現します。

日常生活の階層における社会ネットワーク形成で

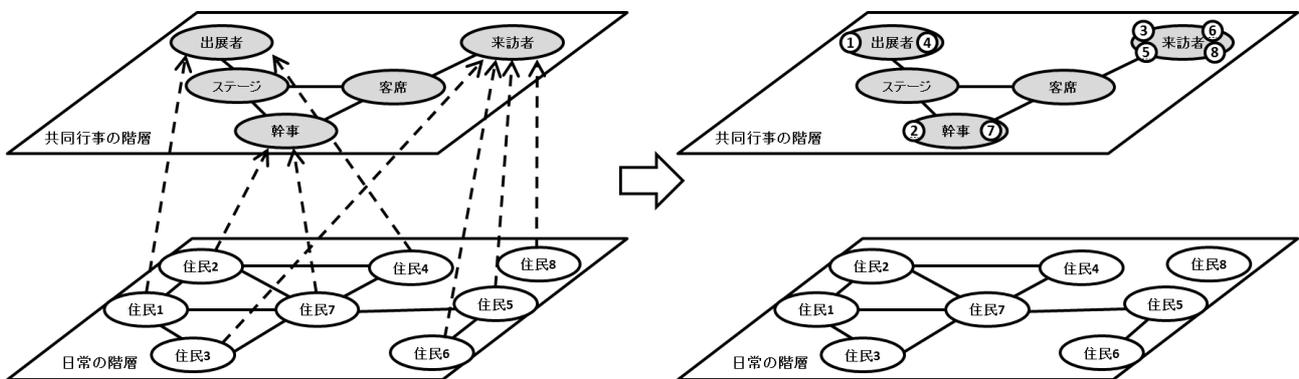


図 3: 縁日における役割の選択と縁日での交流

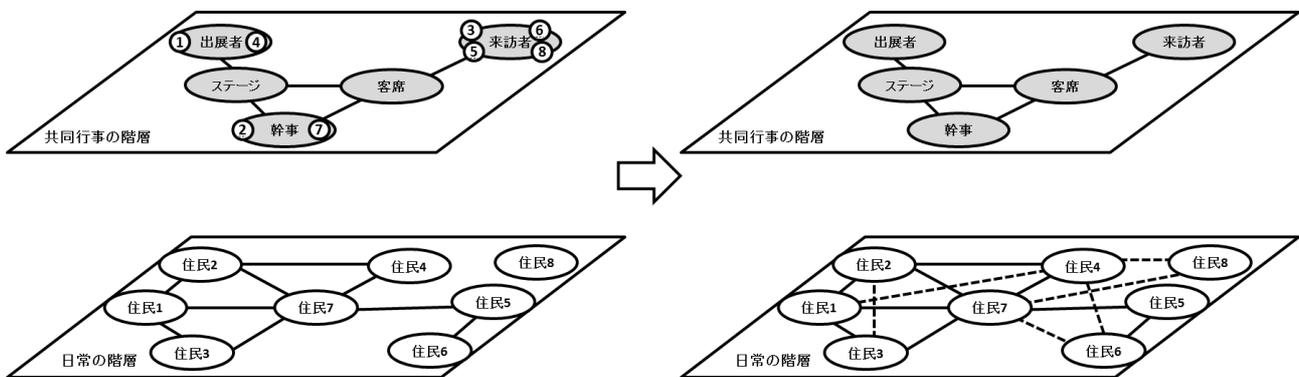


図 4: 縁日での交流から生まれる日常生活の交流（右図における点線が新たに生まれる日常生活の交流）

は、各住民が他の住民と一対一で出会い、交流する状況を考えます(図2の下層)。各住民は、年代や職種などに関して、ある属性をもつものとし、同じ属性をもつ相手の方が、異なる属性をもつ相手とよりも出会い易いことを仮定します。例えば、年代という属性に着目し、「10代以下」、「20代」、…、「80代」、「90代以上」という属性分けをするなら、各住民は、いずれかの年代に属し、年代が同じ相手とは、異なる相手とよりも出会い易いものと仮定することを意味します。縁日での交流が、同じ属性の住民同士のリンク形成のみならず、異なる属性をもつ住民間の交流を拡げる影響も分析していきます。また、各住民は、日常生活の交流において、仕事や趣味の機会を拡げるために、多くの人脈もつ相手と交流したいという嗜好をもち、互いに利する相手とのみ交流するものとします。

日常生活では趣味や仕事、世代が似た相手と交流する一方、縁日ではそういったことは独立に、行事を盛況にするための共同がコミュニケーションのきっかけとなります。よって、縁日の階層における交流(図2の上層)は、日常生活の交流における価値規範とは異なる形で生まれるものとします。換言すれば、他の住民と縁日を共同することで行事における交流が生まれるものとします。共同の実践である縁日を成立させるために、住民が担うべき各役割が存在します。その役割は、アーティファクトである商店街アーケードの各空間的要素や他の役割との関係によって既定されます。例えば、縁日が成立するためには、「出展者」、「来訪者」という役割が住民に担われなければなりません。そして、縁日が行われている商店街アーケードに設置された「ステージ」や「客席」というアーティファクトがある中で、「出展者」は「ステージ」にアクセスでき、「ステージ」から見える「客席」や、そこにアクセスする「来訪者」との関係の中で「出展者」足りえます。こういった関係の中で既定された役割を担いながら、住民は他者やアーティファクトと縁日を共同していると考えられます。よって、本モデルでは、実践共同体である縁日には「役割」と「アーティファクト」による関係構造があるものと考え、それをネットワークにより表現します。とりわけ、実践共同体論では役割を担う人とアーティファクトの間に本質的な差がないことを考慮し、行事における「役割」と「アーティファクト」間の関係を考えます。以降では、このネットワークを「実践共同体ネットワーク」と呼ぶこととします。

縁日が定期的に関われ、各住民が、その実践共同

体ネットワークの関係構造を基に自身にとって最適な役割を選択します(図3の左)。そして、商店街アーケードの空間を利用したり、その利用を通じ他の住民とおしゃべりや挨拶をしたりし、縁日を楽しみます(図3の右)。さらに、図4のように、自身の役割を通じて他の複数の住民と共同することで生まれる縁日での交流の一部が、日常生活の交流にも引き継がれるものとします。縁日の階層から日常生活の階層に引き継がれる交流が、日常生活のネットワーク形成に果たす長期の効果を分析することを通じて、縁日やそれが行われる場の空間的特性の価値評価を行います。なお、本モデルの定式化の詳細は小谷・横松(2016)[13]またはKotani(2016)[14]の6章にまとめられています。

3.2 定量的分析における設定

定量的分析における設定は次の通りです。

- 対象とするアーティファクトと共同行事
「大正筋商店街」とそこで毎年7月下旬に関われる「縁日」を対象とします。
- 対象地域
縁日の参加者のおおよその居住地である、長田区若松町、大橋町、腕塚町、久保町、二葉町の各二丁目-七丁目を対象とします。平成22年(2010年)の国勢調査データ[15]によると、この対象エリアに居住する住民数は $N = 7965$ 人でした。したがって、このエリアの住民によって構成される日常生活の社会ネットワークが分析の対象となります(図5の下層)。
- 日常生活の交流
日常生活の交流を「買い物や道端で偶然会えば挨拶やおしゃべりをする以上との交流」と設定します。
- 住民の属性
住民の属性として「年代」に着目し、「10代以下」、「20代」、「30代」、…、「80代」、「90代以上」の9つの属性分けを行います。なお、年代が2つ以上離れている人同士を「異質な人同士」と呼ぶこととします。例えば、回答者が30代で、相手が20代、30代、40代のいずれかであれば、この2人を同質な人同士とみなし、それ以外であれば異質な人同士とみなすこととします。
- 分析の対象期間
新たな商店街での縁日は平成16年(2004年)に

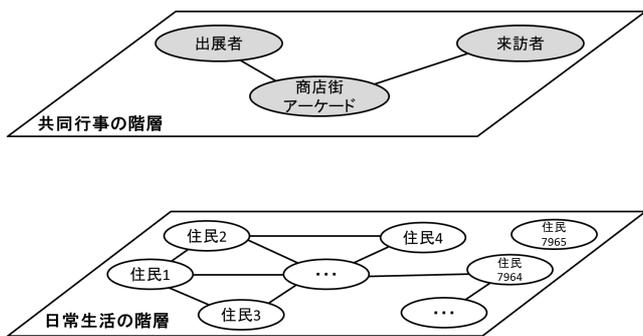


図 5: 定量的分析における階層型の社会ネットワークモデル

始まりました。そのため、その縁日が始まる1年前の平成15年(2003年)から平成27年(2015年)の縁日終了日までの12年間の日常生活の社会ネットワークの変化を分析します。

● 実践共同体ネットワーク

アーティファクトとして「商店街アーケード」、役割として「出展者」と「来訪者」を考えます。商店街アーケードを出展者と来訪者が共に利用することで両者が交流をする関係構造(図5の上層)を仮定します。

3.3 調査の概要

縁日において各住民が担う役割や、縁日で交流する相手の数、縁日を通じて知り合いとなった相手の数、縁日を楽しむ上で重要だと感じる商店街アーケードの空間的特性の数などの定量的分析に用いるデータをアンケート調査によって集めます。対象地域の内、若松町5丁目、大橋丁5-6丁目、腕塚町4-7丁目、久保町4-7丁目、二葉町4-7丁目、アンケート票を全戸郵送配布しました。送付数は2872通でした。調査者は2016年4月4日にアンケート票を長田郵便局に持ち込み、郵送配布の依頼をしました。そのため、アンケート票が各戸に配布されたのはその数日後と考えられます。送付したアンケート票には返信用封筒を添付しました。その返信用封筒を用いてアンケート票を返信してもらうことを回答者に依頼し、アンケート票を郵送回収しました。調査項目の概要は付録Aにまとめられています。

個人属性のみしか書かれていなかったり、無記入であったりした無効回答の4通を除くと、411通の回答を得ました。回収率は14.3%でした。回答者の属性は付録Bにまとめられています。国勢調査のデータ[15]によると母集団の男女比は45:55であり、標

本はそれに近いです。また、縁日主催者によると、当日の縁日参加者はおよそ3000人です。アンケート調査で得られた当日の来訪者の割合37%を母集団の7965人にかけた値は2944人であり、実際の参加者数に近いです。これらから標本は母集団から概ねランダムにサンプリングされたものと考えられます。得られたデータと先述したモデルを用いて、新しい商店街アーケードで縁日が対象地域の日常生活の交流を拡大させてきた効果を計量します。なお、調査で得られた追加的な知見は付録Cにまとめられています。

3.4 定量的分析の結果

震災後の大正筋商店街アーケードで開かれる新しい縁日が地域の日常生活の交流を拡大してきた長期的な効果を計測します。先述した通り、新たな商店街アーケードでの縁日は平成16年(2004年)に始まったので、その1年前の平成15年(2003年)から平成27年(2015年)の縁日終了日までの12年間に、新しい縁日が地域の日常生活の交流に与えた影響を分析します。特に、地域コミュニティにおいて交流をもたない人(以降、説明の便宜上「社会的孤立者」と呼びます。現実にその人が完全に社会との接点をもっていないという意味ではありません。)の人数と年代が2つ以上離れている「異質な人同士の交流」の数の変化に着目します。そして、人々の交流の場となる縁日が12年間の内に社会的孤立者をどれだけ減らし、異質な人同士の交流をどれだけ増やしたのかを明らかにします。なお、モデルのパラメータの推定手法や推定値の詳細はKotani(2016)[14]の7章にまとめられています。

シミュレーションによる分析の結果が、図6と図7です。図6と図7では、縁日の有無に応じた「社会的孤立者の数」と「異質な人同士の交流の数」の時間変化を示しています。各図の青線は縁日を考慮しない場合、赤線は考慮する場合を表します。縁日を考慮する場合、縁日が考慮しない場合に比べて12年間の内に社会的孤立者は地域の社会的孤立者は2.3%(57人)減り(図6)、異質な人同士の交流は1.9%(71組)増えたことがわかりました(図7)。異なる世代間の交流が広がることで、各世代がもつ異なる知識やアイデアの交換や共有が進む、あるいは情報が速く伝達する可能性が高まり、地域の中に新しいアイデアや地域活動が生まれえます。また、交流の機会をもてずにいた住民が地域のネットワークに包摂されることで、社会的孤立が防がれます。さらに、異なる世代間の交流の増加や社会的孤立の減少は、災

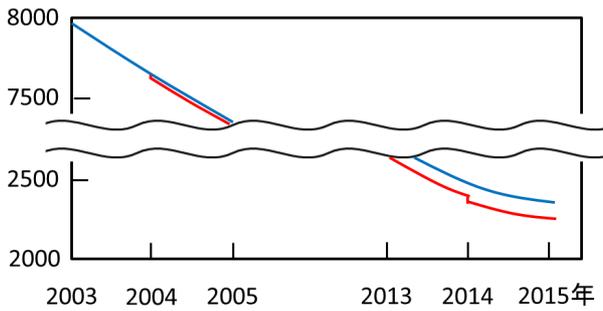


図 6: 社会的孤立者の数の時間変化

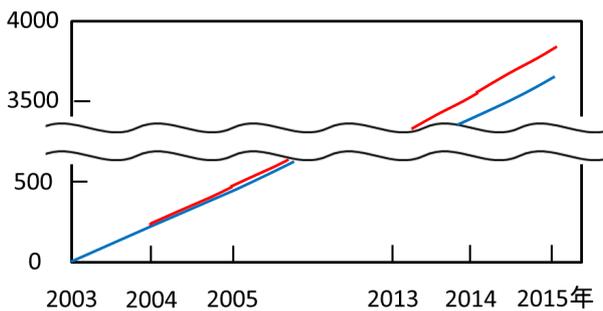


図 7: 異質な人同士（年代が2つ以上異なる人同士）の交流の数の時間変化

害時の情報共有や助け合いも円滑に進めます。縁日が、地域内に上述した様な交流の変化をもたらし、上記の側面で地域に貢献している可能性があります。

4 縁日が行われる商店街アーケードの空間的特性の効果

前章では震災後の商店街アーケードで開かれる縁日が、地域の日常生活の交流にこれまでもたらしてきた長期的な効果を明らかにしました。一方で、2で述べたように、震災後の縁日は、新たな商店街アーケードの巨大な空間を利用することで、縁日の参加者の数や多様性も変化しました。行事の構成員の数や多様性が増したために、行事においても新たなコミュニケーションが生まれ、それをきっかけに日常生活の新たな交流が生まれています。これを踏まえれば、前節で示した、日常生活の交流を拡大させた縁日の効果の一部は、新しい商店街アーケードの空間的特性がもたらしたものと考えられます。

そこで、商店街アーケードのどの空間的特性が日常生活の交流を拓げる上で重要なものとなっているのかを明らかにします。調査では商店街スペースで縁日を楽しむために重要だと感じる項目について質問します（アンケート票の質問 9）。そして、多く

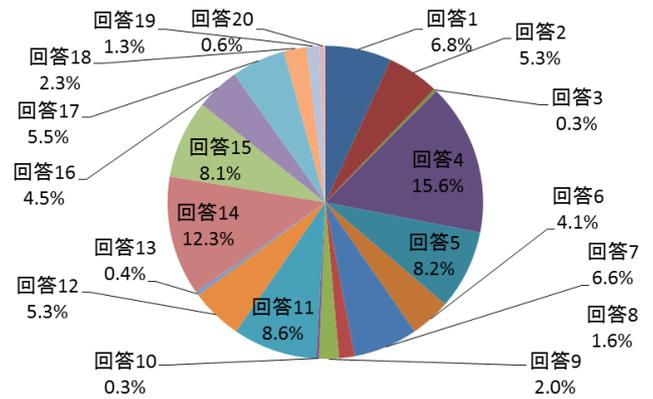


図 8: 商店街アーケードの空間的特性

の回答を得た商店街の空間的特性は縁日がもつ地域の日常生活の交流の拡大効果を生む上で大きな役割を占めるものと考えます。というのも、縁日を楽しむためにより重要だと感じられている空間的特性がなければ、縁日が実行できなかつたり、縁日の魅力が低下したりして、人々が縁日に参加し相手と交流する機会が減り、それだけ日常生活の交流が拡大しづらいと考えられるからです。なお、回答者はアンケート票の項目の中から6つまで選べるようになっています。

集計結果を図8に示します（総回答数 N = 940）。図の回答番号は、アンケート票の質問 9 の回答番号と対応します。図より、出店・出展スペースの回答 4 「屋根があるため天候に左右されない」と回答 5 「床面の段差が（少）ない」、通路スペースの回答 14 「屋根があるため天候に左右されない」と回答 15 「床面の段差が（少）ない」、回答 11 「道幅が広い」という空間的特性が多くの人にとって縁日を楽しむために重要だと感じられていることが分かります。よって、上記の各空間的特性は縁日の実行可能性や魅力を高め、縁日における交流を促進し、日常生活の交流の拡大に大きく寄与している可能性が高いです。今後、これらの空間的特性の価値を認識しながら、縁日やその他イベントにおける空間利用やアーケードの整備を検討することが肝要でしょう。

5 まとめ

本報告書の執筆者である小谷と横松を中心としたグループは、2012年より、新長田において、阪神・淡路大震災後の復興事業による商店街アーケードなどの地域インフラの形態や外観の変化が地域の交流にもたらした影響について研究を行ってきました。これまでに、新長田の商店街でのインタビューやアンケート調査によって、震災後の地域のインフラの変

貌によって買い物時に交わすおしゃべりという実践が変容した可能性を指摘しました。一方で、その買い物時に交わすおしゃべりの減少を補うかのように、新しい商店街アーケードでは様々な地域の共同行事が行われるようになり、人々がそれへの参加を通じて日常生活の交流を拡げている点に着目しました。そして、今回、共同行事が日常生活の交流の形成に果たす役割を分析し、新しい地域インフラの機能を明らかにすることを目指しました。本報告書の3では、新たな大正筋商店街アーケードで開かれる縁日を対象とし、私たちが開発したシミュレーションモデルを用い、縁日が日常生活の交流を拡大する効果を定量的に評価しました。4では、それに寄与する商店街アーケードの空間的特性を示しました。具体的な結果として、新たな商店街アーケードで縁日が開かれるようになってからの11年間で、縁日を行わなかった場合に比べ、誰とも交流をもたない社会的孤立者が1.9%（57人）減り、年代が2世代以上異なる人同士の交流が2.3%（71組）増えたことがわかりました。これらの日常生活の交流の拡大は、異なる背景をもつ人たちによる新たな地域活動や素早い情報伝達、災害時の助け合い行動などの実現可能性を高めていると推測されます。さらに調査では、上記の日常生活の交流の拡大効果に重要な役割を占めていると考えられる商店街アーケードの空間的特性は、「屋根があるため天候に左右されない」、「床面の段差が（少）ない」、「道幅が広い」という特性であることがわかりました。これらの特性の一部は、復興事業が意図したように商店街の耐震性や耐火性を高め、ハード面で地域に貢献しているでしょう。本結果は、それに加え、これらの特性が地域の日常生活の交流を拡げる縁日の実行可能性を担保していることを意味します。つまり、新しい商店街アーケードは、災害時の助け合いなどの基礎となる交流を生み出す縁日の開催を通じて、非ハード面でも地域コミュニティに貢献していると考えられます。これは新たな商店街アーケードの看過されてきた機能や価値であるといえます。

一方で、本報告書で示したモデルや調査法はいくつかの課題を残します。第一に、幹事の数や異質な人同士の交流の数が極めて大きく見られなかったのは、このことが一因となっている可能性があります。今後、幹事へのインタビュー調査などによってデータを集め、幹事をモデルに取り入れた精緻な分析を行うことが必要です。第二に、本調査では、4で取り上げた商店街アーケードの各空間的特性が独立に機能するものと考えた点です。ただ、実際は各特性が互いに補完的な関係になっている可能性も考えられます。例えば、「道幅が広い」とことと「天井が高く圧迫感を感じにくい」とことは、商店街の開放感を感じながら縁日を楽しむ上で、補完的な関係にあるかもしれません。今後、空間的特性の補完性を考慮した調査法の構築が必要です。それによって、各空間的特性が生むネットワークの拡大効果を定量的に評価できるようになる可能性があります。

以上のような課題があるものの、新長田の地域インフラの変貌が買い物時の交流にもたらした影響や新たなインフラが地域行事を担保することを通じて日常生活の交流を拡大する機能を、質的あるいは量的に明らかにしました。一連の研究で得られた情報や知見が新長田の今後のまちづくりに有益なものとなれば幸いです。

謝辞：一連の活動を行う上で、新長田まちづくり株式会社の宍田正幸様に多大なるご協力をいただきました。また、2016年4月の調査にあたり、大正筋商店街の役員の今井嘉昭様、藤原孝彦様、伊東正和様には調査の趣旨をご理解いただき、ご協力をいただきました。対象地域の住民の方々からは多数のご回答をいただきました。皆様に深く御礼申し上げます。なお、本調査は、科学研究費補助金・特別研究員奨励費（課題番号：15J08041）の助成を受けて行われました。ここに記して感謝申し上げます。

付録 A 調査項目

以下に、3.3で行った調査の調査項目の概要を示します。なお、本報告書の9頁目から16頁目に、実際に配布されたアンケート票を示しています。

1. 縁日への参加状況について

大正筋商店街で開かれる縁日への回答者の参加の仕方（全体の運営・準備に携わる「幹事」側か、出店者及び出展者として参加する「出展者」側か、出展・出店を訪れ、楽しむ「来訪者」側か）、参加年数、その行事に携わっている時間について問います。アンケート票の問1から問4に対応します。

2. 縁日を通じて知り合いになった人について
縁日を通じて知り合いになった人の有無、知り合いになった人がいれば付き合い方（直接連絡を取って会う、手紙・メール等で連絡を取る、など）毎の人数ついて問います。アンケート票の問5と問6に対応します。
3. 縁日を通じて知り合いになった人の縁日における参加の仕方、属性について
縁日で知り合いになった人の中から、最大4人まで列挙してもらい、各人の縁日における参加の仕方と属性（年代、職業など）を問います。アンケート票の問7と問8に対応します。
4. 縁日を楽しむために重要だと感じる商店街アーケードの空間的特性について
縁日における商店街のスペースは、出店や出展が行われる「出店・出展スペース」と、来訪者が通行する「通路スペース」に分けられますが、それらのスペースの物理的特性の内、縁日を楽しむために重要だと感じる特性を問います。アンケート票の問9に対応します。
5. 縁日への支払意思額について
資金不足のため縁日の開催が危ぶまれている状況を想定してもらい、これまで通り開催を行うために寄付をいくらまでならしてくれるかを問います。回答者が「0円」と答える場合には、その理由も問います。アンケート票の問10と問11に対応します。なお、支払意思額の意味についてはC.4で詳述します。
6. 日常生活の交流状況について
地域内の日常生活において交流する人数を付き合い方（直接連絡を取って会う、手紙・メール等で連絡を取る、など）毎に問います。また、交流がある相手の中から最大4人まで列挙してもらい、その相手の属性（年代、職業など）を問います。さらに、縁日以外をきっかけとして新たに地域で出会う人の人数などを問います。アンケート票の問12から問15に対応します。
7. 回答者の属性について
回答者の性別、年代、職業、職種、長田区での居住年数を問います。アンケート票の最終頁に対応します。

アンケート票全体にわたって、答えにくい質問には答えずに、次の質問に移ってもらうようお願いしました。

アンケート票

- はじめに、毎年7月に行われる「大正筋商店街の縁日」へのあなたの参加状況等についてご質問します。

質問1. 縁日への参加の仕方として、あなたに当てはまるものはどれですか。当てはまるものに○をつけてください(複数回答可)。

- | |
|--|
| 1. 幹事などの主に全体の運営・準備に携わるかたち |
| 2. 出店・出展をするかたち |
| 3. 当日、出店を訪れたり出展を楽しんだりして参加するかたち
⇒ 3だけに○をつけた場合は「質問3」へ |
| 4. その他の参加のかたち ※内容をお書きください() |
| 5. 参加していない ⇒ 5ページ目の「質問10」へ |

質問2. 例年、縁日の当日までの準備や打ち合わせに、おおよそどれくらいの時間をつかっていますか。当日の準備につかう時間も含めてください。以下のAかBの答えやすい方を選び、()に数字を記入してください。

- | |
|------------------------------------|
| A. 1年間に計()日間で、1日あたり()時間程度つかっている。 |
| B. 1年間に合計で()時間程度つかっている。 |

質問3. 質問1で答えたようなかたちで、何年ほど縁日に参加していますか。当てはまるものに1つ○をつけてください。また、参加している年数を()に記入してください。

- | | | | |
|------------|----------|-------------|------------|
| 1. 1年間 | 2. 2～4年間 | 3. 5～9年間 | 4. 10～14年間 |
| 5. 15～20年間 | 6. それ以上 | ()年間参加している | |

質問 4. 昨年の縁日の中で気持ちよく、あるいは、楽しく、(接客を含めた)挨拶やおしゃべりをした人たちは何人くらいいますか。相手の参加の仕方に応じて、それぞれ該当する箇所に○をつけてください。「それ以上」に○をつけた場合、可能であれば、おおよその人数を記入してください。

	0 人	1～ 5人	6～ 10人	11～ 15人	16～ 20人	21～ 25人	26～ 30人	それ以上
【記入例】					○			
幹事などの主に全体の 運営・準備に携わる方 ^{かた}								()人程
出店・出展をする方 ^{かた}								()人程
当日、出店を訪れたり 出展を楽しんだりして参 加する方 ^{かた}								()人程

質問 5. 縁日をきっかけで知り合いとなった長田区若松町、大橋町、腕塚町、久保町、二葉町の住民の方はいますか。当てはまるものに1つ○をつけてください。

1. いる	2. いない ⇒ 4 ページ目の「質問 9」へ	3. わからない ⇒ 4 ページ目の「質問 9」へ
-------	----------------------------	------------------------------

質問 6. そういった人の中で次のようなかたちで縁日を離れた日常生活でも交流が続いている人は何人いますか。該当する箇所に○をつけてください。「それ以上」に○をつけた場合、可能であれば()におおよその人数を記入してください。

	0 人	1～ 5人	6～ 10人	11～ 15人	16～ 20人	21～ 25人	それ以上
【記入例】				○			
個人的に事前に約束をして会い、食事や会話を楽しむかたち							()人程
個人的に事前に約束をして会ったりはしないが、手紙・メール・電話等で連絡を取り合うかたち							()人程
個人的に事前に約束をして会ったり、連絡をとったりはしないが、縁日以外の地域行事(地藏盆や地域の忘年会)で会ったときにはおしゃべりするかたち							()人程
個人的に事前に約束をして会ったり、連絡をとったり、縁日以外の地域行事で会ったりもしないが、買い物や道端などで偶然会えば挨拶やおしゃべりするかたち							()人程

※質問 6 で全て「0 人」に○をつけた人は 4 ページの「質問 9」へ。

質問 7. 質問 6 で答えた人たちの中から 4 人までの人を思い浮かべてください(4 人が難しければ 3 人以下でも構いません)。その人たちを順に「A さん、B さん、C さん、D さん」と呼ぶこととします。その人たちは縁日にどうかたちで参加しています(いました)か。それぞれの人の参加の仕方に最も近いものに○をつけてください。

	A さん	B さん	C さん	D さん
幹事などの主に全体の運営・準備に携わるかたち				
出店・出展をするかたち				
当日、出店を訪れたり出展を楽しんだりして参加するかたち				
その他の参加のかたち				

質問 8. 分かる範囲でよいので質問 7 の「A さん、B さん、C さん、D さん」の年齢と職業と職種を教えてください。下の「設問 8 の選択肢」から数字を選んで、表に記入してください。

	【回答例】	A さん	B さん	C さん	D さん
年齢	5				
職業	2				
職種	11				

質問 8 の選択肢

年齢

1. 10 代以下 2. 20 代 3. 30 代 4. 40 代 5. 50 代 6. 60 代
7. 70 代 8. 80 代 9. 90 代以上 10. わからない

職業

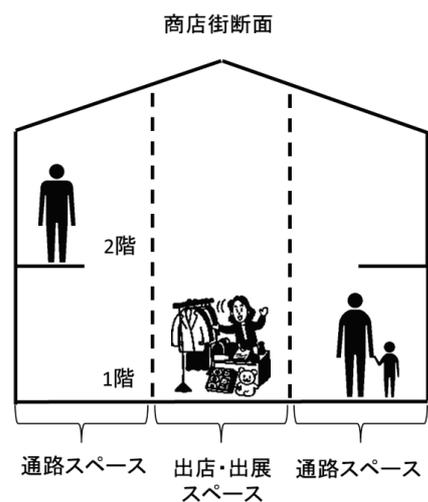
1. 会社員 2. 自営業 3. 公務員 4. 専業主婦 5. パート・アルバイト
6. 生徒・学生(中・高・大・専門・その他) 7. 無職 8. その他 9. わからない

職種

1. 農林水産業 2. 鉱・採石業 3. 建設業 4. 製造業
5. 電気・ガス・水道業 6. 運輸・通信業 7. 卸売・小売業 8. 金融・保険・不動産業
9. 学術研究 10. 宿泊業 11. 飲食サービス業 12. 娯楽業
13. 教育・学習支援業 14. 医療・福祉 15. その他 16. わからない

質問 9. 縁日では、商店街のスペースは「出店・出展スペース」と「通路スペース」に分かれています(一例が右の図です)。

商店街のスペースであなたが縁日を楽しむために重要だと感じる項目が次のページの表の 1~20 にあれば、その中から 6 つまで ○をつけてください。その他に思い当たる点があればそれを()に記入してください。



出店・出展スペース	通路スペース
1. 道幅が広い	11. 道幅が広い
2. 通路が長く、見通しがよい	12. 通路が長く、見通しがよい
3. 床面の模様・色	13. 床面の模様・色
4. 屋根があるため天候に左右されない	14. 屋根があるため天候に左右されない
5. 床面の段差が(少)ない	15. 床面の段差が(少)ない
6. 屋根から日光が取り入れられている/ 街灯がある	16. 屋根から日光が取り入れられている/ 街灯がある
7. 天井が高く圧迫感を感じにくい	17. 天井が高く圧迫感を感じにくい
8. 2階を見ることができる/2階から見られる場所である	18. 2階から1階を見ることができる/1階から見られる場所である
9. 展示物や広告を貼れる街灯や壁面がある	19. 展示物や広告が貼られている街灯や壁面がある
10. その他()	20. その他()

● 突然ですが、次のような 仮想的な 状況を想定してください。

「ある事情により大正筋商店街の縁日を開催するための資金が今年から集まらず、このままでは縁日の開催が難しい状況です。そこで、これからは地域コミュニティの中で住民の方々に寄付を募り、その資金を集めることにします。寄付をしていただくことでこれまで通りの縁日が開催されます。」

質問 10. あなたは 毎年いくらまでなら寄付してもいいですか。最も近いものに1つ○をつけてください。ただし、この寄付の分だけあなたの自由に使えるお金が減ることを忘れないでください。

1. 0円	2. 300円	3. 500円	4. 1000円	5. 2000円
6. 3000円	7. 5000円	8. 7000円	9. 10000円	10. 12000円
11. 15000円	12. 20000円	13. それ以上 ()円		

質問 11. 質問 10 で「1. 0円」とした方は、その理由に1つ○をつけてください。

1. 縁日を開催する必要はないと感じたため
2. 縁日を開催してほしいが、生活に余裕がなく寄付に応じようがないため
3. 対策は必要だが寄付でまかなうことに反対なため
4. 状況設定がよくわからなかったため
5. 金額による評価が難しかったため
6. その他(ご自由にお書きください:)

- 次に、あなたの日常の交流についてご質問します。

質問 12. ()におおよその数字を記入してください。

平均して週に()日休みがある。 趣味や娯楽に使える自由な時間は、 - 休日には 1 日()時間ほどあり、その内、()時間ほどの時間を知人と過ごす。 - 休日 <u>以外</u> の日には 1 日()時間ほどあり、その内、()時間ほどの時間を知人と過ごす。
盆と正月にはあわせて()日ほど休みがある。 その中で、趣味や娯楽に使える自由な時間は、1 日()時間ほどあり、その内、()時間ほどの時間を知人と過ごす。

質問 13. 長田区若松町、大橋町、腕塚町、久保町、二葉町の中で、次のようなかたちで交流をしている人は何人いますか。該当する箇所にも○をつけてください。「それ以上」に○をつけた場合、可能であれば、おおよその人数を記入してください。

	0 人	1～ 5 人	6～ 10 人	11～ 15 人	16～ 20 人	21～ 25 人	それ以上
【記入例】					○		
個人的に連絡をして会い、 食事や会話を楽しむかたち							()人程
個人的に事前に約束をして会ったりはしないが、手紙・メール・電話 等で連絡を取り合うかたち							()人程
個人的に事前に約束をして会ったり、 連絡をとったりはしないが、縁日以外の地域行事(地藏盆や地域の忘年会)で会ったときにはおしゃべりするかたち							()人程
個人的に事前に約束をして会ったり、 連絡をとったり、縁日以外の地域行事で会ったりもしないが、買い物や道端などで偶然会えば挨拶やおしゃべりするかたち							()人程

※質問 13 で全て「0 人」に○をつけた人は 7 ページ目の「質問 15」へ。

質問 14. 質問 13 で思い浮かべた人たちの中で、大正筋商店街の縁日をきっかけとして出会った人を除き、4 人までの人を思い浮かべてください(4 人が難しければ 3 人以下でも構いません)。その人たちを順に「E さん、F さん、G さん、H さん」と呼ぶこととします。分かる範囲でよいのでその人たちの年齢と職業と職種を教えてください。下の「設問 14 の選択肢」から数字を選んで表に記入してください。

	【回答例】	E さん	F さん	G さん	H さん
年齢	2				
職業	1				
職種	13				

質問 14 の選択肢

年齢

1. 10 代以下 2. 20 代 3. 30 代 4. 40 代 5. 50 代 6. 60 代
7. 70 代 8. 80 代 9. 90 代以上 10. わからない

職業

1. 会社員 2. 自営業 3. 公務員 4. 専業主婦 5. パート・アルバイト
6. 生徒・学生(中・高・大・専門・その他) 7. 無職 8. その他 9. わからない

職種

1. 農林水産業 2. 鉱・採石業 3. 建設業 4. 製造業
5. 電気・ガス・水道業 6. 運輸・通信業 7. 卸売・小売業 8. 金融・保険・不動産業
9. 学術研究 10. 宿泊業 11. 飲食サービス業 12. 娯楽業
13. 教育・学習支援業 14. 医療・福祉 15. その他 16. わからない

質問 15. 大正筋商店街の縁日をきっかけとした出会いを除くと、長田区若松町、大橋町、腕塚町、久保町、二葉町の中で、年間におおよそ何人の人との新しい出会いがありますか。その他の地域行事(地蔵盆や地域の忘年会等)における新しい出会いも含めてください。当てはまるものに 1 つ○をつけてください。「それ以上」を選んだ場合、可能であれば()におおよその人数を記入してください。

1. 0 人	2. 1～5 人	3. 6～10 人	4. 11～15 人
5. 16～20 人	6. 21～25 人	7. それ以上	8. わからない
()人程			

- 最後に、あなた自身についてご質問します。それぞれ該当する番号に○をつけてください。

性別					
1. 男性			2. 女性		
年齢					
1. 10代以下	2. 20代	3. 30代	4. 40代	5. 50代	6. 60代
7. 70代	8. 80代	9. 90代以上			
職業					
1. 会社員	2. 自営業	3. 公務員	4. 専業主婦	5. パート・アルバイト	
6. 生徒・学生(⇒いずれかに○:中・高・大・専門・その他)			7. 無職	8. その他()	
職種					
1. 農林水産業	2. 鉱・採石業	3. 建設業	4. 製造業		
5. 電気・ガス・水道業	6. 運輸・通信業	7. 卸売・小売業	8. 金融・保険・不動産業		
9. 学術研究	10. 宿泊業	11. 飲食サービス業	12. 娯楽業		
13. 教育・学習支援業	14. 医療・福祉	15. その他()			
長田区居住年数					
1. 1年未満	2. 1年以上5年未満	3. 5年以上20年未満	4. 20年以上 ()年程		

長田区の縁日や地域行事、あるいは、今回の調査についてご意見などがございましたら下の枠内に自由にご記入ください。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。同封の封筒で 4月30日(土)までにご返送をお願いいたします。

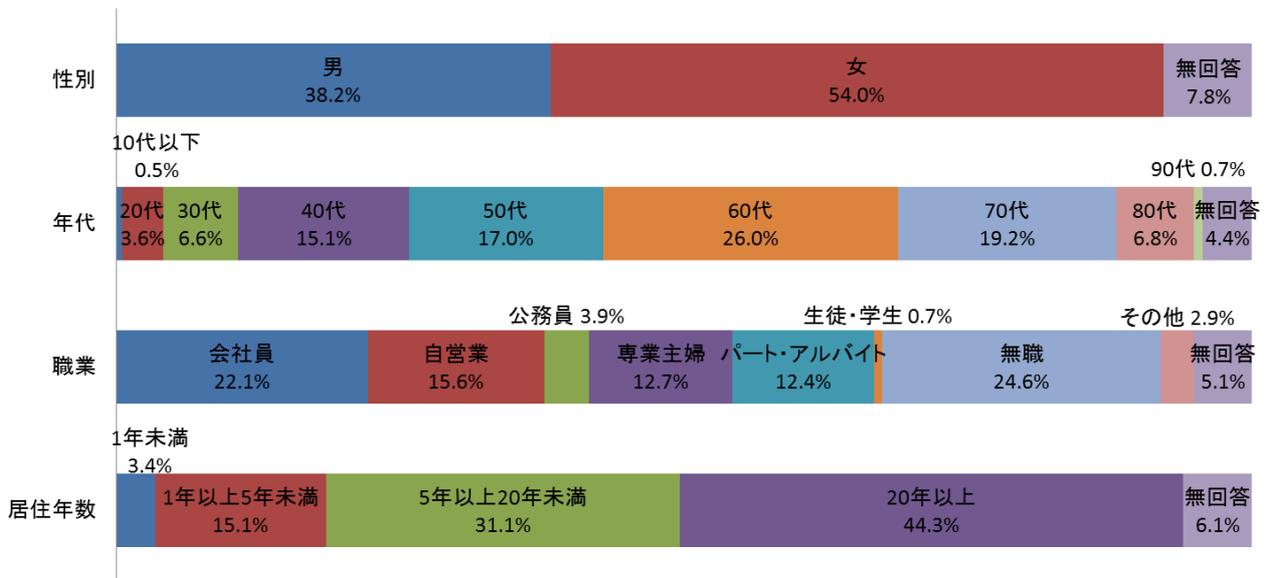


図 9: 回答者の属性

付録 B 回答者の属性

3.3で行った調査の回答者の性別、年代、職業、長田区居住年数の各分布を図9に示します。

付録 C 3.3の調査で得られたその他の知見

C.1 縁日への参加状況や縁日での交流

縁日への参加の仕方の内訳を図10に示します(回答者数 N = 401)。回答者の約41%は縁日に参加しており、その内のほとんど(約89%)は来訪者として参加しています。

参加者であると答えた回答者の縁日への参加年数の内訳を図11に示します(回答者数 N = 155)。新しい商店街アーケードでの縁日は平成16年(2004年)に始まりましたが、縁日に参加する回答者の内の約75%は10年未満の参加年数であり、参加者の多くは新しい商店街で縁日が開かれるようになってから参加していることがわかります。

各役割を担う人が2015年の縁日で、気持ちよく、あるいは、楽しく(接客も含めた)挨拶やおしゃべりをした相手の人数の分布を、相手の役割に応じて示したものが図12と図13です。図12は回答者が出展者の場合、図13は回答者が来訪者の場合です。縁日において出展者は、幹事、出展者、来訪者のそれぞれ少なくとも1人とは必ず挨拶やおしゃべりをしていることがわかります。一方で、来訪者の中には、他の来訪者あるいは出展者と挨拶やおしゃべりを全くしない人がそれぞれ約28%、約26%いるものの、来訪者の約半数程度は、1人から5人の他の来

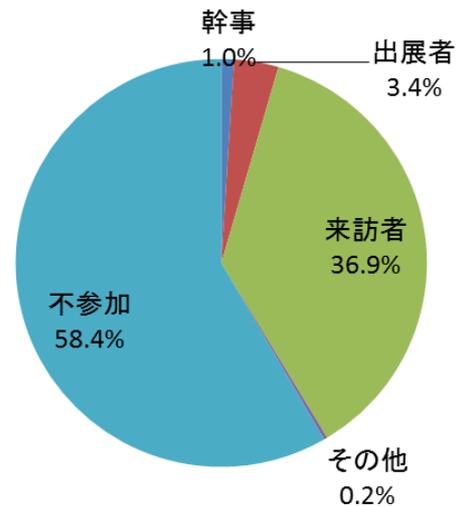


図 10: 回答者の縁日への参加状況

訪者あるいは出展者と気持ちよく挨拶やおしゃべりをしていることがわかります。

C.2 対象地域における縁日以外の機会での出会い

次節以降で、前節で示した縁日での交流から新しい人と出会い、その出会いから日常生活の交流がどれだけ生まれているかを示します。本節では、その前に、縁日をきっかけとした出会いを除くと、対象地域でどれくらいの出会いがあるかを分析します。対象地域において、縁日をきっかけとした出会いを除くと、新しい相手と出会う機会が少ない状態であれば、縁日が交流を拡大させる役割は相対的に大き

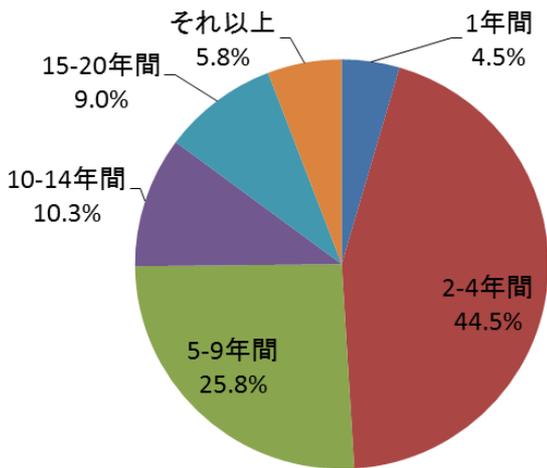


図 11: 回答者の縁日への参加年数

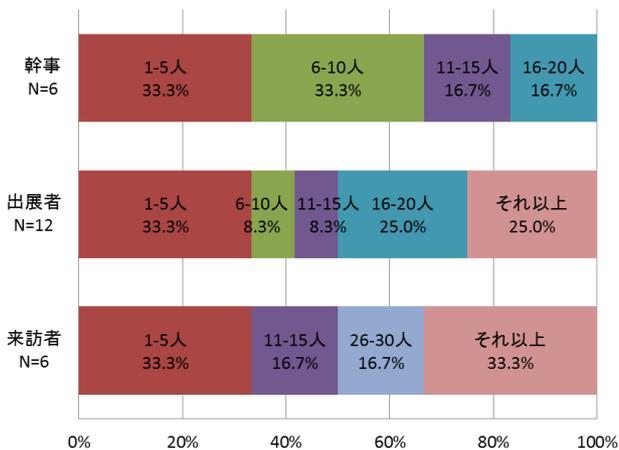


図 12: 出展者の縁日での交流状況

なものとなるでしょう。上記のことを明らかにするために、調査では対象地域で年間におよそ何人の人との出会いがあるかを質問しました。ここでは、縁日以外の地域行事（地蔵盆や地域の忘年会等）における新しい出会いも含めてもらいました。回答結果をまとめたものが図 14 です（回答者数 N = 358）。この図が示すように、縁日を除いた場合、回答者の約 46%は年間に地域で新しく出会う人が 1 人もいないことがわかります。また、回答者の約 35%は新しく出会う人数を 1-5 人と答えており、新しく出会う場合でもその人数は多くはないことがわかります。縁日をきっかけとした出会いを除いた場合、地域の中で新しい人との出会いが多いとは言い難いです。

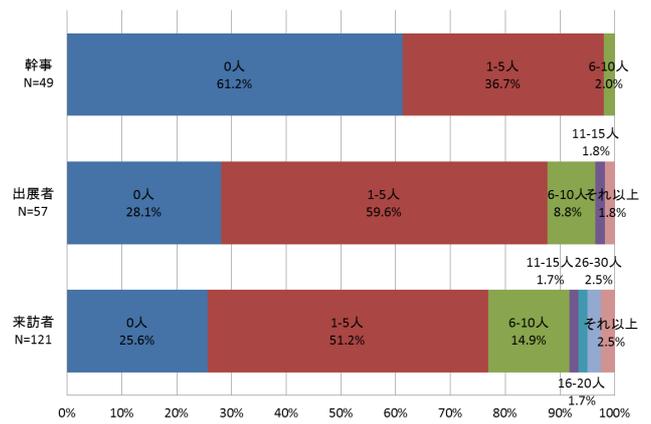


図 13: 来訪者の縁日での交流状況

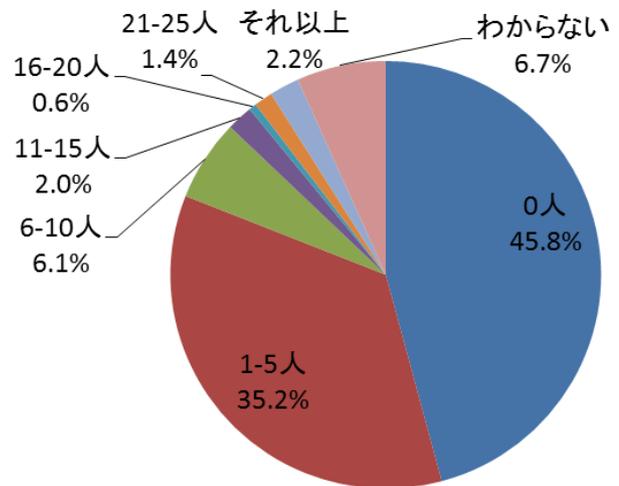


図 14: 縁日以外をきっかけに新たに知り合いとなる相手の人数/年

C.3 縁日をきっかけに生まれる地域の日常生活の交流

一方で、縁日をきっかけに新しく知り合いとなった人がいるかどうかを分析します。縁日をきっかけとした新たな出会いがこれまであったかどうかを質問した回答結果が図 15 です（回答者数 N = 166）。回答者の約 31%は縁日をきっかけに知り合いとなった人がいます。対象地域では縁日を除くと新たな相手と出会う機会が少ない中で、縁日がこれまで知り合いでなかった人同士を結びつける場として機能していることがわかります。

また、縁日をきっかけに知り合いとなり、日常生活でも交流が続いている相手が何人くらいいるのかを調査します。相手との交流の仕方毎に人数を示し

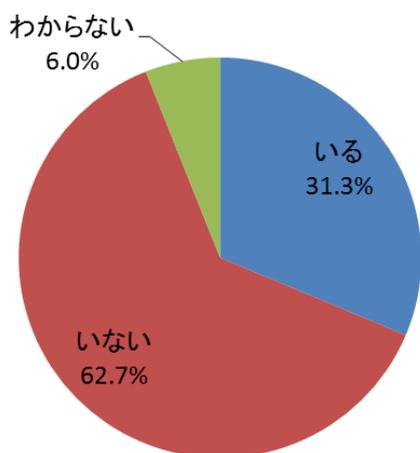


図 15: 縁日をきっかけに新たに知り合った相手がいるかどうか

たものが図 16 です。この図から「個人的に事前予約をして会ったり、連絡をとったりはしないが、縁日以外の地域行事で会ったときにはおしゃべりするかたち」(図の上から 3 段目)で 1-5 人と交流が続いている人は回答者の約 47%、「個人的に事前予約をして会ったり、連絡をとったりはしないが、買い物や道端などで偶然会えば挨拶やおしゃべりするかたち」(図の上から 4 段目)で 1-5 人と交流が続いている人は回答者の約 52%あり、上記の交流の仕方です日常生活の交流が続くことがわかります。また、割合は相対的に多くないが、縁日をき

かけに知り合った相手と「個人的に事前予約して会い、食事や会話を楽しむかたち」(図の上から 1 段目)と「個人的に事前予約をして会ったりはしないが、手紙・メール・電話等で連絡を取り合うかたち」(図の上から 2 段目)で交流が続いている人も一定割合いることがわかります。

他方、縁日をきっかけに知り合いとなり日常生活でも交流が続いている相手はどういう相手なのかを分析します。つまり、縁日をきっかけに日常生活でも交流が続く人同士の属性の違いを分析します。調査では縁日をきっかけに知り合いとなり日常生活でも交流が続く相手の中から最大 4 人までを思い浮かべてもらい、その人たちの個人属性を質問した。属性として年代に着目し、年代が 1 つ以内でしか離れていない相手を「同質な相手」、年代が 2 つ以上離れている相手を「異質な相手」と呼ぶこととします。例えば、40 代の回答者が、50 代の相手 A と 70 代の相手 B を思い浮かべた場合、回答者と相手 A は年代が 1 つしか変わらないので相手 A は「同質な相手」となり、回答者と相手 B は年代が 2 つ以上離れているので相手 B は「異質な相手」となります。

この集計結果が図 17 です (ペア数 N = 152)。この図から分かるように、縁日をきっかけに知り合いとなって交流が続いているペアの約 80%は同質的である一方で、全ペアの内、約 20%は 2 つ以上年代が離れた相手との交流です。縁日をきっかけに生まれる新しい交流の大半は年代が似た者同士との交流であるものの、年代が 2 つ以上違う相手との交流も一

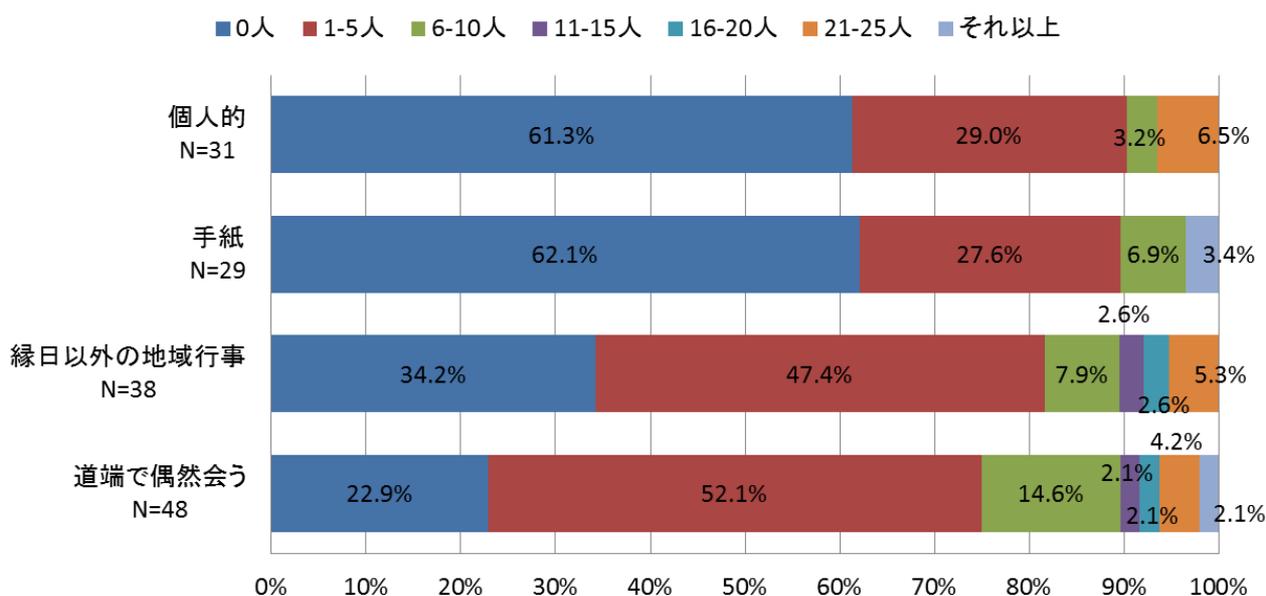


図 16: 縁日をきっかけに知り合い、日常生活でも交流が続いている相手の人数

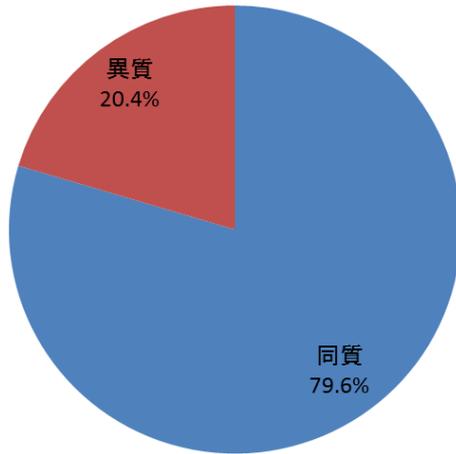


図 17: 縁日をきっかけに知り合い、日常生活でも交流を続けるペアの属性

定割合生まれていることがわかります。

C.4 縁日への支払意思額

経済学では、売買が成立する価格によって、取引される財（もの）やサービスの価値を評価します。市場価格には人々の評価が反映されているからです。しかし、環境のようなものには、取引される市場がないため、市場価格がありません。そこで、環境経済学の分野では、あたかも各個人が、対象とする環境に「値を付ける」ような状況（すなわち市場）を仮想的に設けることによって、当該環境の価値を評価する手法が開発されています¹。例えば、地域に新しい公園ができるものとします。もちろん、現実にはこの公園には誰でも無料で入ることができます。しかしこの手法は、その価値を計測するために「公園にはゲートが設置され、そこで料金を払わないと中に入れないものと仮定します。料金がいくらまでであれば、あなたはこの公園を利用しようと思えますか？」といった質問をします。この「いくらまで」の額は、新しい公園への「支払意思額」と呼ばれており、回答者にとってのこの公園の価値になります。

本調査でも、現在の縁日の価値を評価するために上記の手法を用います。回答者には、縁日の開催が危ぶまれており、寄付によってこれまで通りの縁日を実施される状況を想定してもらいます。そして、こ

¹この手法は、環境のように、本来、取引する市場が存在しない財やサービスの価値を、仮想的に市場が存在することを想定して、支払意思額によって明らかにする手法であるため、「仮想市場法」と呼ばれています [16]。

の寄付金額を尋ねることで、現在の縁日への支払意思額を明らかにします。この支払意思額を分析し、回答者が現在の縁日に対してどれくらいの価値を感じているのかを分析します。なお、調査では「0円」と答えた回答者にその理由も質問しました（質問11）。「0円」と答えた理由として、「3. 対策は必要だが寄付でまかなうことに反対なため」、「4. 状況設定がよくわからなかったため」、「5. 金額による評価が難しかったため」のいずれかを選んだ回答者は、縁日が続けていくことに対しては価値を認めているものの、寄付という支払い手段へ反対したり、状況設定がわかりにくかったりしたために「0円」と回答した「抵抗回答」とみなすことができます [16]。そのため、以下では抵抗回答を除いた支払意思額の結果を示します。

集計結果を回答者の縁日への参加の仕方毎に示します。図18と図19は縁日の出展者と来訪者の支払意思額の分布をそれぞれ表し（回答者数は順にN = 13、133）、図20は縁日不参加者の支払意思額の分布を表します（回答者数N = 185）。図18から、出展者の約47%は1000円までなら支払ってもよいと考えていることがわかります。また1000円以上の支払意思額を回答した割合は来訪者のそれよりも多いです。出展者が来訪者よりも縁日に価値を感じていることがわかります。また、図19から、来訪者の約29%は500円まで、約30%は1000円までなら支払ってもよいと考えていることがわかります。一方で、図20から、縁日不参加者の約26%は支払いをしないと回答しているものの、縁日に参加していないにも関わらず、約25%は500円まで、約27%は1000円までなら支払ってもよいと考えていることがわかります。つまり、縁日不参加者の多くは縁日に参加していなくても得られる、縁日の「非利用価値」を享受していることがわかります。非利用価値には、子どもや孫のために縁日を残すことに対して価値を感じる「遺産価値」や縁日が開かれる地域で生活しているという事実自体から満足を感じる「存在価値」などが含まれると考えられます [16]。さらに、非利用価値には、3.4で示した、縁日をきっかけとした出会いによって地域の日常生活の交流が拡大し、異なる知識やアイデアの交換が促されたり、情報伝達が速まったりすることで得られる価値も含まれるでしょう。上記の便益を縁日不参加者も享受していることが、本結果からも示唆されます。

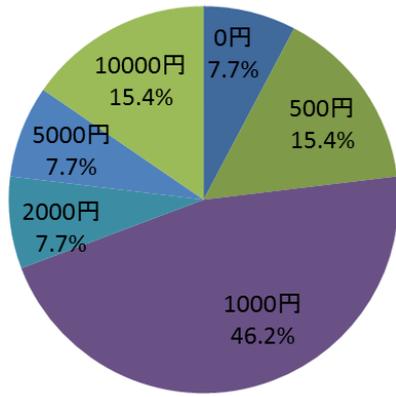


図 18: 出展者の支払意思額

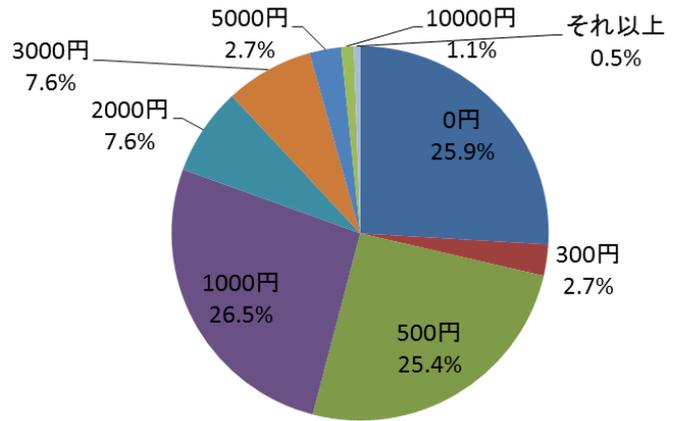


図 20: 縁日不参加者の支払意思額

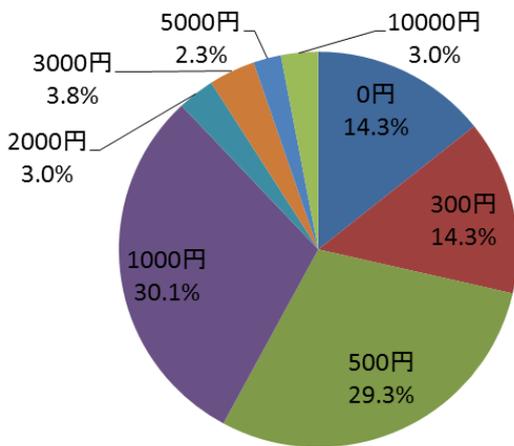


図 19: 来訪者の支払意思額

イを使って遊ばせてくれるので小さな子どもはとて嬉しそうです。おばちゃん達と話をしながら子ども達の顔を近所の人に覚えてもらいながら遊ばせられる縁日は自分が子育て世代になり自分が子どもの時とはまた違った意味を持ち大切だと感じます。

- 縁日や地蔵盆は幼い子ども達が楽しみにしているので続けてほしい。

子ども達が楽しめる縁日のさらなる実現を期待する意見として例えば次のようなものがありました。

- 数年前にあった夏のスイカ割がないのがさみしい。子どもが楽しみにしていました、残念です。
- 縁日は子ども目線の出店が少なく、小さな子どもたちが楽しめる昔ながらの出店がいいと思います。縁日はバザーではありません。去年など文化祭のようでした。

C.5 自由回答欄における意見

商店街における縁日やその他の地域行事の運営に関して、回答者が自由回答欄に記入した意見をまとめたものを以下に示します。

C.5.1 子どもが楽しめる縁日や地域行事の実現

小さな子ども達が楽しめる縁日であることを評価する意見(8件)やそういった縁日や地域行事のさらなる実現を期待する意見(11件)が多かったです。例えば、小さな子ども達が楽しめる縁日であることを評価する意見として次のようなものがありました。

- 他で出店など行くと高い金額ですぐポイがダメになり小さな子ども達はほとんど楽しめませんが商店街の縁日はとても良心的な金額で強いポ

C.5.2 地域に根差した縁日や地域行事の実現

地域に根差した縁日やその他の地域行事の実現を求める意見もありました(5件)。例えば、次のような意見です。

- 大学の文化祭やバザーの様な縁日であり、地域の子供たちが安全に楽しめる縁日ではない様に思う。どの出店を見ても同じ様な食べ物であったり、ゲームも中高生向けのものばかりであったりし、「夏の縁日」ではありません。4-5年前までは縁日でした。

- 最近の縁日はただ騒がしいだけ。日本文化のかけらもない。長田の土地柄もあるのだろうが到底「縁日」とは思えない。地域の活性化は賛成だが中身を吟味すべきと思う。

C.5.3 安全な縁日や地域行事の実現

自転車や飲酒、喫煙のマナーを守り、安全な縁日や地域行事の実現を求める意見もありました(3件)。例えば、次のような意見です。

- 縁日における自転車の乗り入れと喫煙をやめてほしい。アルコールは決まった所だけで飲めるようにしてほしい。子ども達のための縁日なので大人がマナーとルールを守りきちっとした姿を見せたい。
- 自転車の通行が多いので商店街での催しはそばに住んでいる者として歩くのに危険を感じます。

C.5.4 PR や告知

縁日の存在自体や日時を知らなかったという回答者もあり、行事の告知やPRの促進を望む意見がありました(6件)。例えば、次のような意見です。

- Facebook などを用いて開催のお知らせ等を若い世代の方々にも伝えていく必要があると思います。
- 早くからスケジュールを周知すべき。

C.5.5 音や時間帯

縁日やイベントの音や時間帯について肯定的な意見や改善を求める意見がありました(6件)。例えば、次のような意見です。

- (商店街で開かれるイベントを)時々見かけ、音も聞いていると楽しく心もはずみ、町に活気があるような気分になります。
- 音楽のボリュームが大きすぎたりするのはダメ。夜は8時には切り上げるようにしてほしい。
- マンションの高層階に居住しています。上階では音が反響してとても大きくエコーがかかったように聞こえます。窓を開けておくと、うるさくてたまらず、夏は困っています。

C.5.6 縁日や地域行事での空間の使い方

地域行事における空間の使い方については1件の意見がありました。

- イベント時、商店街中央通路に出店したり、ブースを設置したりすることが多いですが、自転車で買い物に行ったりすると横断できず不便なことがあります。

参考文献

- [1] 塩崎賢明. (2014). 復興〈災害〉: 阪神・淡路大震災と東日本大震災. 岩波新書.
- [2] 岡田豊. (2011). 過去の震災時の教訓から考える「復興」のあり方～迅速な復興の難しさ～. みずほ総研論集, III, 11-46.
- [3] 岩手日報. (2012). 大規模再開発の影「復興災害」嘆く店主. <http://www.iwate-np.co.jp/311shinsai/saiko/saiko120505.html>, 2012-05-05.
- [4] アジアプレス. (2013). 震災地を歩く～神戸・新長田. <http://www.asiapress.org/apn/archives/2013/01/30073932.php>, 2013-01-30.
- [5] Lave, J. and Wenger, E. (1991). *Situated Learning Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press (佐伯胖訳, 福島真人解説. (1993). 状況に埋め込まれた学習, 産業図書).
- [6] 石黒広昭. (2001). 実践のエスノグラフィ 茂呂雄二編著 2章 アーティファクトと活動システム. 金子書房.
- [7] 直田梓, 国領優. (2013). 震災後の神戸市長田区商店街の変貌と地域愛着. ～買い物で交わす「おしゃべり」に着目して～. 京都大学工学研究科キャップストーンプロジェクト報告集.
- [8] 小谷仁務, 横松宗太. (2014). 災害による環境変化と共同実践の変容過程に関する基礎的研究. 土木学会論文集 D3 (土木計画学), 70(5), I.241-I.254.
- [9] 小谷仁務, 岩堀卓弥, 直田梓, 国領優, 張詩雨, 梶原哲朗, 杉山高志, 藤田陽介. (2013). 商店街でのおしゃべりがインフラ～復興から生まれる新しい新長田～. 第47回土木計画学研究発表会・講演集 公共政策デザインコンペポスター.

- [10] Putnam, R. D. (2001). *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. Simon and Schuster (柴内康文訳. (2006). 孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生. 柏書房).
- [11] Aldrich, D. P. (2012). *Building Resilience: Social Capital in Post-disaster Recovery*. University of Chicago Press (石田祐, 藤澤由和訳. (2015). 災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か 地域再建とレジリエンスの構築. ミネルヴァ書房).
- [12] 小谷仁務, 横松宗太. (2015). 神戸市長田区の縁日・地蔵盆と地域の交流の拡がりに関する調査研究. 都市計画報告集, 14, 91-98.
- [13] 小谷仁務, 横松宗太. (2016). 地域行事が行われる場の構成に関する定量的評価モデルの開発: 社会ネットワークアプローチ. 土木計画学研究・講演集, 53.
- [14] Kotani, H. (2016). *Evaluation of the Function of Local Assets on the Formation of Social Networks and a Resident's Identity*. Doctoral Dissertation, Kyoto University (小谷仁務. (2016). 社会ネットワークとアイデンティティの形成過程に着目した地域資産の機能評価に関する研究. 京都大学博士論文).
- [15] 平成 22 年国勢調査. (2010). 総務省統計局. <http://www.city.kobe.lg.jp/information/data/statistics/toukei/kokutyoushu/index.html>, 2010.
- [16] 栗山浩一. (1997). 公共事業と環境の価値 CVM ガイドブック. 築地書館.